



新年ご挨拶

学校法人 鶴学園
理事長・総長 鶴 衛

平素、鶴学園の教育運営に多大なるご理解ご協力をいただいております皆様へ、遅くなってしまいましたが、新年のご挨拶を申し上げます。

皆様におかれましては、健やかに新年をお迎えのこととお喜び申し上げます。

昨年は、日本の歴史に残る悲しい1年となりました。3月11日に発生した東日本大震災は、大地震と大津波により未曾有の大災害をもたらしました。マグニチュードは日本観測史上最大の9.0を記録し、大津波は場所によっては波高10m以上、最大遡上高は40mにも及ぶ凄さでした。死者・行方不明者は約2万人、被災者は10万人を超えました。

さらに、地震と津波による被害を受けた東京電力福島第一原子力発電所では、全電源を喪失したことにより原子炉を冷却できなくなり、大量の放射性物質の放出を伴うという重大な原子力事故が発生しました。発電所から半径20km以内に住んでいた人々は、長期の避難を余儀なくされています。また、関東・東北地方をはじめ、電力不足は全国に広まりました。原子力による災害は、とりわけ広島市民の心を強く締め付けます。

亡くなられた方々に心よりご冥福を申し上げますとともに、被災された皆様の心が1日でも早く落ち着くようにお見舞い申し上げます。

この大災害から立ち上がろうと努力しておられる東北地方をはじめとする被災者から私は、人間の命は有限であり、その限られた命を大切に守り、他者の命を尊重し決して傷つけることな

く、そして一日一日をまじめに精進していかなければならない、ということ改めて教えられました。その姿勢は、本学園の建学の精神「教育は愛なり」と教育方針「常に神と共に歩み社会に奉仕する」を具現化しているように感じます。被災者の皆様の心に敬服いたします。

昨年は、本学園の広島工業大学と中学校が、創立50周年を迎えたという大きな節目の年でした。広島工業大学では、9月17日に創立50周年を記念した式典・祝賀会を開催し、旧ラグビー場をラグビー、サッカー、陸上競技ができる人工芝のグラウンド“グリーンフィールドH.I.T.”に改修しました。今年の春には、学生のクラブハウスを旧広島高校北校舎へ改装移転する予定です。学園創立50周年のときには「三宅の森Nexus21」を建て、学生への教育・学習の整備を行いました。この度は、学生のキャンパスライフの充実を考えた教育環境整備です。

中学校は、広島工業短期大学附属中学校として開学し、今は広島なぎさ中学校へとつながっています。中学校の50周年を祝う会は、広島なぎさ高校の50周年も考慮して計画したいと考えています。

今年、広島工業大学は、新たなチャレンジを始めます。情報学部にある健康情報学科を改組し発展させ、4月から生体医工学科と食品生命科学科から構成される生命学部をスタートさせます。生命学部は、高齢社会と食糧問題が世界的規模で進展することが予測されるなかで、生命科学に関

する工学技術の進化や社会的ニーズなどに応える人材を養成することを目的としています。

さて、今年はどうのような年になるのでしょうか？日本経済は、内憂外患の状況だと言われています。世界に目を向ければ、ユーロ圏の債務危機や新興国の経済減速懸念といった不安が広がっています。また、主要国で国家のリーダーを選ぶ選挙が目白押しです。選挙の結果は、世界経済に大きな影響を及ぼす可能性があります。

国内に目を向ければ、急激な円高と公的債務の増加に加え、震災復興にかかる莫大な資金が国家財政の悪化に拍車をかける恐れがあります。この状況を打破するためにリーダーシップを発揮しなければならない政治は、混迷するばかりです。今年も厳しい年となりそうです。

この状況を打ち破るためには、大胆な行財政改革を行うとともに、日本人がかつて世界に誇っていた伝統ある文化に基づいた上質な日本人に戻る努力が必要だと思います。稲盛和夫氏の言葉をかりれば、「たとえ経済的に豊かではなくても高邁に振る舞い、上に媚びず下には謙虚に接し、自己主張することもなく、他に善かれかしと思ひやる」そんな美德を持った日本人です。

日本は、戦後の急速な経済発展を成し遂げ、物質的な豊かさを得ましたが、逆に精神的な豊かさを失い、上質な日本人が減少していったようです。世界史をひも解いてみますと、繁栄した国家がやがては没落をしていく過

程は、外からの攻撃によるものではなく、内部からの社会的崩壊から始まる、ということをお話されています。日本も同じような過程をたどっているのではないのでしょうか。

私は、この歴史の教訓を『日本の自殺』という論文から学びました。この論文は、昭和50(1975)年2月に発行された文芸春秋にありました。そこには、かつて地中海沿岸全域とその周辺地域を制圧し、“永遠の都”とまで呼ばれたローマ帝国の没落は、まさにローマの繁栄の絶頂期に始まったと書かれています。

いかにしてローマは滅亡したか。その最大の理由は、“パンとサーカスの要求である”と記されています。つまり、巨大な富を集中し繁栄を謳歌したローマ市民は、「大土地所有者や政治家の門前に群がって“パン”を求め、大土地所有者や政治家もまたこれら市民大衆の支持と人気を得るためにひとりひとりに“パン”を与えたのである。このように働かずして無料の“パン”を保障されたかれら市民大衆は、時間を持って余さざるを得ない。どうしても退屈しのぎのためにマス・レジャーが必要となる。かくしてここに“サーカス”が登場することとなるのである。…こうして無償で“パンとサーカス”の供給を受け、権利を主張するが責任や義務を負うことを忘れて遊民化したローマの市民大衆は、その途端に、恐るべき精神的、道徳的退廃と衰弱を開

始したのである。…繁栄と福祉の絶頂に達したと錯覚していたときに、ローマ社会の芯は腐り始め、ローマ人の魂は衰弱し、ローマの没落が確実に始まっていた」のです。

1980年代終わりから1990年代初めまでバブル経済に酔いしれていた日本人の姿が、かつてのローマ人とダブって見えるのは私だけでしょうか。

先ほど述べましたように、この論文は昭和50年に発刊されています。当時の筆者たちは、すでに日本の政治的、経済的、社会的な沈没を危惧しています。しかしながら現代社会の日本人は、バブル経済崩壊以降も筆者たちの警告を全く無視するかのようには振舞ってきたように思われます。残念ながら、私もその現代社会の日本人の一人です。このように昨年末に私が考えていましたところ、本年1月10日の朝日新聞が『明日の社会に責任をもとう「日本の自殺」を憂う』という特集を組んでおり、同じ論文を引用して私の懸念と同じ内容の指摘をしていました。

この論文に接し、私は改めて私たちにできることは何か?と問うてみました。私の胸をついて出てくるのは、子供たちの教育においては、嘘をついてはい

けない、人に迷惑をかけてはいけない、自分のことばかりを考えてはならない、人を思いやる心を持って欲しい、といった基本的な規範を教え、額に汗して努力することの大切さを伝えなければならぬ、という想いです。本学園の教育方針にある「神と共に歩む」ということ、「社会に奉仕する」ということはこういうことだと思います。本学園創立者の鶴 襄が逝ってから5年がたちますが、私は今、この遺訓の深さと今日性を噛みしめています。

一人でも多く、上質な日本人を育て、日本社会を内部から立て直して行きたいものです。教育という仕事にこそ、それができます。今、教育は日本にとってことのほか重要なものになっていると思います。本学園の教職員は、常に学園の教育理念を心に抱いて、それぞれの役割に取り組んでいきます。そして、転機を迎えた日本の将来のために、新しい教育創りをすると目標に向かって努力して参りますので、皆様より益々のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。